

TAKE FREE

ZAMA+ | vol. 06

北海道教育大学岩見沢校 卒業生へのインタビュー



+ 広告代理店 営業課

及川 浩奈 OIKAWA HIRONA

Topics

学ぶ、作る大学時代

教職と就職

仕事と制作

北教大岩見沢から、その先へ

ZAWA+について

2020年より、新たに始まったi-BOXのシリーズ企画「ZAWA+」。
本展では岩見沢(ZAWA)から飛び立った、卒業生のその後と現在(+)
をご紹介します。岩見沢校が現在の芸術・スポーツを学ぶ大学に
形を変えてから十年以上が経過しました。これまでに岩見沢の地
を巣立った卒業生たちは、社会経験を積みながら近年、活躍の幅
を広げつつあります。教員、会社員、クリエイター... 様々な進路
に進んだ卒業生たちは、今一体何を考え、何を作っているのでしょ
うか? 「ZAWA+」では、社会とかかわりながら、自らの作品を
作り続ける卒業生の皆様をご紹介します。



1996年北海道札幌市生まれ。小3〜中3までそろばん教室に通う。幼い頃からものを作るのが好きで、あまり外に遊びに行かず家で絵を描いていることが多かった。中学高校の部活動は美術部、油彩画は高校に入ってから描き始めた。学校祭などのイベントや日差しがたっぷり入る教室が好きで、大人になっても学校にいたい、という思いから教師を志す。得意な教科が美術だったため、美術を専門的に学べる北海道教育大学岩見沢校へ入学する。

入学後は油彩画研究室に所属。光が印象的な作品を制作する。卒業後は広告代理店である株式会社近宣に入社。働きながらもグループ展等へ積極的に参加し、「記憶の美化」をテーマに制作を続ける。好きなものは日差し、ローカル（雑音のない環境）、河合隼雄、坂元裕二。嫌いなものは生産性のないもの（無意味だと思っ飲み会など）。

及川 浩奈

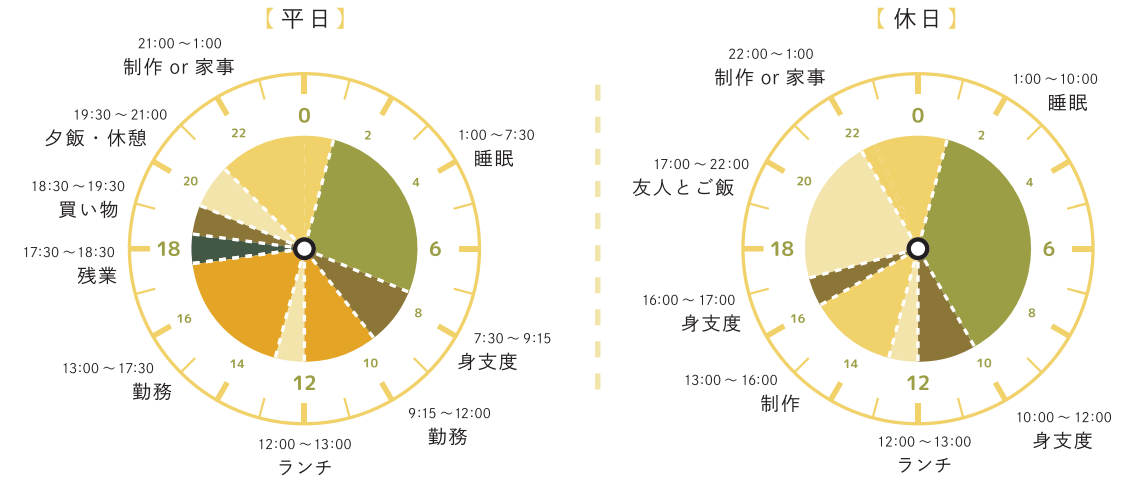
オイカワ ヒロナ

vol. 06 + 広告代理店 営業課

オイカワさんってどんな人？

HITOTONARI SPACE

Q.1 | オイカワさんの一日



Q.2 | オイカワさんの5カジョウ

- + 直感を信じる
- + 自分に嘘をつかない
- + 石橋を叩いて渡る
- + 身近な人を1番大切にしている
- + 地味でもコツコツ真面目に生きる

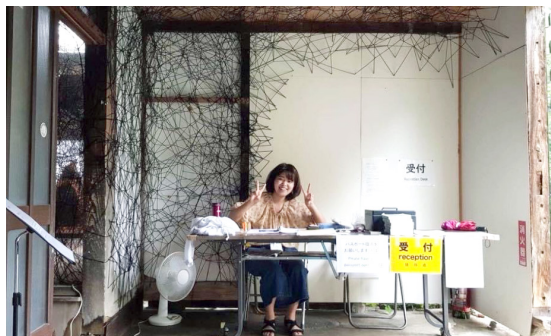
Q.3 | 現在のお仕事



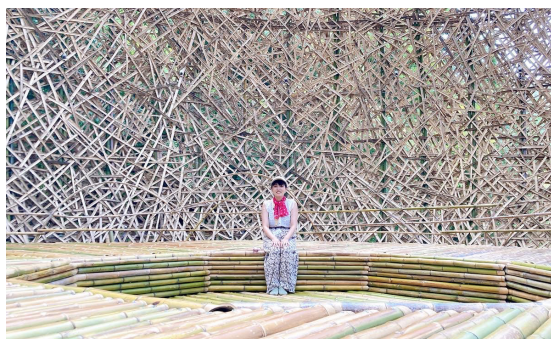
2022年札幌コレクションブース出展の様子



初めて取引したクライアントの看板



※6. 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018 「家の記憶」/ 塩田千春にて撮影



※6. 瀬戸内国際芸術祭 2022 「ゼロ」/ 王文志にて撮影



※4. 2年時の作品「sunlight & road」/ F4号

※6. 大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭は、美術館での作品展示ではなく、一般居住地区での作品展示が多い。ボランティアは展示会場で受付業務を担い、質問の対応や入場料の管理を行う。



※2. 油彩画研究室での思い出。(写真左上) 船岳先生。



※3. 親子ディキャンプの様子

※1. 及川さん曰く「光と色がとても綺麗な油彩画を描く作家さん」。受験時より模写や色使いを真似して、曾谷さんの要素を取り入れようとしていた。2022年には曾谷さんのトークショーに足を運び、直接の出会いを果たす。

※3. ことばの教室に通う子どもとその保護者を中心に行うキャンプ。学校では少し窮屈になってしまう子ども、このキャンプではのびのびとやりたいことをやることが出来る。及川さんは大学生の時よりボランティアとして参加。

大学時代の思い出

―北海道教育大学岩見沢校に入学後は、油彩画研究室に所属されたね。

曾谷朝絵さん^{※1}という油彩画家に憧れて、こんな風に油彩を描きたいなと思い、油彩画研究室を選びました。そこで、指導教員の船岳先生とお話しした中で印象に残っているのは「絵画の中でも流行するものがあるって、そのブームはすぐ去るけれど、昔から残っている良いものは何年経っても良いもの。SNSでバズるとか、わかりやすいものに惑わされやすい時代だけど、本当にいいものは別にあるよね。」というお話です。

当時は実感しなかったのですが、今商業的なことをやっている、やっぱりわかりやすいものに目があってしまう現実があります。広告業界は流行が大事な世界ではありますが、制作で承認欲求のために描くと良い作品でなくなってしまうので…本質的なものは目立たないけど、流行と混同してはいけ

ないですよ。

―及川さんは在学時代、札幌校の平野直己先生(臨床心理研究室)とも出会って影響を受けたと伺いました。

平野先生との出会いは、大学4年生の教職の授業です。平野先生の研究分野は臨床心理学で、授業自体は教育相談、いじめ、不登校など、心の動きについての話でした。平野先生とはプライベートでもたくさんお話させて頂いて、「記憶って蓋をしているだけで、ちゃんと開ければ出てくるんだよ」と仰っていたのが印象に残っています。

また、平野先生が余市教育福祉村で開催している親子ディキャンプ^{※3}が年に数回あるのですが、今でも都合が合えばボランティアとして参加し、卒業した後も交流は続いています。私はそのキャンプの中では美術担当みたいな立ち位置です。ほとんど教えたりはしないうですけど、キャンプに来ている子どもたちの「あれしたい、これしたい」をお手伝いしたり見守っ

たりしています。

―平野先生との記憶の話は、及川さんの制作テーマ「記憶の美化」にも繋がってくるんですね。

最初は「記憶の美化」を意識していたわけではなくて、日常的に自分がいるところ、且つ光が良かった場所を描いていただけでした。^{※4}日差しが好きだから、と描いていくうちに「記憶の美化」に辿り着きました。「記憶の美化」をテーマにして描き始めたのは大学4年生の頃です。^{※4頁5}

油彩画研究室は、「考えるより描け！」というスタイルの研究室で、制作に打ち込むうちに自然と一人の時間が増えました。すると、ずっと絵を描いていると頭の中で記憶がぐるぐるして、「考えすぎると美化されるな」と気づきました。この「記憶の美化」というテーマは、映像でやっている人は結構いるんです。例えばドラマ『ONE』回目のプロポーズとか。回想シーンが白くてモヤモヤしていて、顔がはっきり写っていなかったりするんですよ。思い出に浸って昔の記憶を

美化しちゃってる感じとか、白くてモヤモヤしている感じを見て、似てるな、やりたいことコレだな!と思いました。

―及川さんは、制作活動の他に日本各地の芸術祭にも参加していると伺っていますが…

大学3年生の夏に新潟の「越後妻有大地の芸術祭」に1ヶ月。そして昨年の夏、「瀬戸内国際芸術祭2022」に1週間滞在しました。一人でボランティア^{※6}として参加して、向こうの地域の人たちと喋るのが楽しいんです。ボランティアとして行くけど宿泊費がタダで、新潟ではベッドが8個くらいある小学校みたいな場所にみんな寝泊りしました。ワーキングホリデーとして来ていた台湾の人と翻訳アプリを使ってお話ししたり、地域の人が開いてくれた食事会やお祭りに参加したりと、そこに住む地域の人との触れ合いが楽しく癒されました。

―人との交流が特に印象深かったですね!

※5. 卒業制作 1300×1620mm×3点 / 2019



「one scene ~ すれ違いの記憶 ~」



「one scene ~ 懐しい薫り ~」



「one scene ~ 煌く日々 ~」

そうですね。作品を見たい！というよりも、1ヶ月くらい遠くに住みたくて、紹介されたのがたまにたま芸術祭だったんです。と言うのも、大学生活で心がすり減ってしまっ。働き始めてからは、嫌なことがあってもその分良いことが返ってくると分かったのですが、大学では徐々にすり減って、良いことが返ってこない。地道に返ってきているのかもしれないけど感じにくくて、頑張っても報われないなあ、と思ってしまったんです。私にとって芸術祭は、慰安旅行みたいな感じでした。でも「ローカル×芸術」という点は、自分でも気づかないうちに作品に活かされていたと思います。

― 学生時代、本当に様々な経験を積んでいた及川さんですが、学生時代に学んだことで今に活かしているな、と思うことはありますか？

実は「BOX」の学生スタッフ※次頁7として働いていたので、スポーツ専攻の人にインタビューしたり、音楽専攻の演奏会に行ったりした取材経験は、就活の時に使えまし

たね。自分が学んでいた美術の話は専門的すぎて、面接でもなかなか伝わりづらいのがネックだったので…。もし絵にしか興味なかったら、この会社には入れなかったと思います。いろんなことに興味を持つことが広告代理店の世界では大事で、一つのことを勉強するよりもミラーな方がいいとも言われていますから。でも、美術を学んだことが活かされていないかと思ったら、全然そんなことはありません。デザイナーのラフ案を描くときやデザイナーとのやり取りで、学びが活きているなと感じます。提案されたデザインを見たときに自信を持って意見を言えるのは、私には美術の基礎がある、という自信があるからだと思っています。

教職と就職

― 就職活動について教えてください。

3年生の2月あたりから就活を始めました。エントリーシートも

! Pick Up! /



【自宅での制作の様子】

自宅の床と壁をDIYをして、生活空間と制作スペースを区切っているそう。場所を作ることで卒業しても大きな油彩画作品を描き続けられるんですね！(編集担当者コメント)



※7.i-BOXはJR岩見沢駅にある北海道教育大学岩見沢校のミニギャラリーを併設した広報施設。学生スタッフは展示物の管理を行うほか、学内での出来事取材してSNSで発信する業務を担う。



※7. 展覧会の準備をしている様子



※7. スポーツ専攻の学生に取材を行っている様子

合わせる20社ほど受けて、塾業界や写真館のお姉さんの道も考えていましたが、現在は広告代理店で働いています。

きっかけは、お世話になっていらっしゃる方の「広報向いてるんじゃない？」の一言です。営業職をガツガツやりたい！というより、ある程度人と喋れて、自分が考えていることが形になる仕事がいいな、ということで広告にしました。広告代理店の仕事に就けば、いろんな業種の人と関わって勉強できるなという思いもありました。

先生になりたくて教育大に入学した、とのことでしたが、実際には広告代理店にお勤めですよね。就職を選んだのは何か心境の変化があったのでしょうか。

教員免許は取りましたが、採用試験は受けていません。先生になりたい気持ちはあったのですが、学部4年間では勉強が足りていないと思っただけです。学校の先生になる人は大学院まで行く人が多いのですが、私には院に行く体力がなくて。それならまず会社員を

やって、勉強して、自信が持てた頃に先生になろう、と考えました。当時は、絵も先生も勉強が中途半端で、今の私では社会人どころか人の上に立つ仕事は無理じゃないか、社会人としての基礎を学べば、子供達に教えることに自信がつかない、と思い就職しました。

あと、学校の先生は常識がない、なんて言われますよね。実際、人間の仕事を知らずに新卒で先生になる人も多くいます。子供たちが将来先生になる割合は低いのに、先生の仕事しか知らないのはどうなんだろう？という疑問が頭の片隅にあったことも、就職の理由の一つでした。

実際に就職をしてみようとしたか？

今の会社は営業職じゃないからこそ、分業ではなく全部一括、デザインも企画も自分で考えられるところが魅力です。基本的に数字を上げるのが仕事で、内容が良くても売上がなければ怒られます。数字を気にして生きていますね。そろばんをやっていたので、数字

に関することは好きなのかもしれないです(笑)。営業と言うと、とにかく売れまくって数字を上げる、みたいなイメージがありますが、やっていくとそうでもないんです。お客さんに良い提案をして、信頼関係を築けば自然と数字もついてきます。

学生の中には広告業界を目指す人もいますが、及川さんが思う広告系で採用されやすい人の特徴などはありますか？

例えば我が社の基準で考えれば、コミュニケーションがとれる人、企画を楽しんでいる人を採用します。いいね、と言われる人の共通点は、場慣れしていることかもしれないですね。営業職なので、ハキハキ喋れる人は通りやすいです。

採用は企業側も必死で、実はこちらも学生と同じように準備や対策をしています。学生の時は、受かりたい会社に合わせていくスタイルを取りがちですが、会社からしたら、感覚で「うちと違うな」と分かってしまいます。こういう子が必要だよな、と思う人を探っ

仕事と制作

卒業後も展示会に参加するなど、積極的に活動を続けていますが、制作時間はどのように確保しているのでしょうか。

今はルーティンがあるので、毎日コツコツ描いています。大学では丸々一週間描けない時期もありましたし、コツコツやるか一気にやるかの違いで、トータル作業時間は同じくらいのはずです。

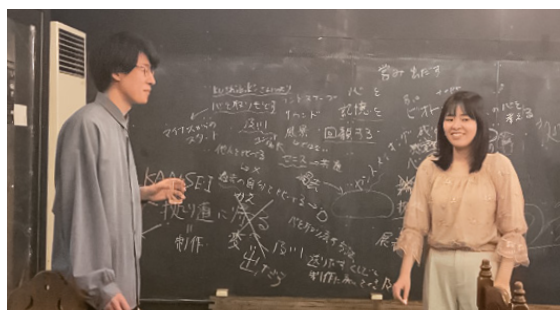
生きていく上で、制作が必要な人も、必要ない人もいます。私は仕事がない！というのはしんどくて、制作があるほうが日々楽しいです。いろんなところに自分がある、一個ダメになっても、これがあるからいいや！と思えるようになるので。



※10. 江別市では若手アーティストをサポートする事業「まちでさぐりさぐり」を2021年に開催。参加したことをきっかけに、江別の土地を描くようになった。その後、江別の土地柄や出会えた人たちが好きになり、よく遊びに行っている。



柳引さんがいわみざわ公園バラ園で環境音を録音している様子。



今回の展示に向けて打合せをしている様子。(左) 柳引さん、(右) 及川さん。

「これからやっていきたいことはありますか？」
制作は細々と続けていきたいです。「光」「記憶の美化」というテーマは変えず、ずっとローカルで。今までは主に岩見沢を描いていたので、江別や余市など、エリアを広げながら繋がりのあるローカル

じました。曲を数分聴いただけで「この人は凄いセンスの持ち主だ！柳引さんなら私の絵を音で表現してくれるかも!？」という直感が働き、すぐに一緒に展示をやりたいと声をかけました。自分が学びたい!と思う人や場所には凄く直感が働くのですが(ビビッとくる的な)、柳引さんは音楽を聴いて直ぐに直感が働きました。
今は、自分と繋がりがあがるものを新しいジャンルに展開していく、ということをやりたいと思っています。方向性が決まってきた今だから、新しいことに挑戦できるのかもしれません。大学時代は模索中だったので…。自分がしっかりしていないと、人を展示に誘ったりできないですね。

「この地域を描いていきたいです。最近の仕事仕事!となっていて将来のことを考えなくなってしまうのですが、今後は生活の中に絵の割合を増やしていきたいですね。どこか海外の地域に移住して、その街を勉強したい、という気持ちもあります。
将来的に先生になるとは限らないのですが、ワークショップをやったり、子どもと関わっていききたいです。でもなかなか実践する場がなく、チャンス待ちです…。及川さん頼むわ!って言われるのを待っています(笑)。



※9.HUGでの展示会の様子。(左) 長谷田さん、(右) 及川さん。



※8. 油彩画研究室で2~3ヶ月に1度行われる自主制作作品を研究室生みんなで講評する会。研究室生の前に、作品のテーマや描き方などについて述べ、それに対して教員・学生から質問や意見が交わされる。

ただ、学生の時は講評会[※]に向けて描くことができたんですが、働き出すと外との約束を取り付けて描く、という感じでなければ描けなくなってしまうところはあります。周囲に描け!と言われることは一切ないので、自分で締切を作って追い込んでいたかたちです。
先日、北海道教育大学アーツ&スポーツ文化複合施設HUGで行った展示会「光と陰の音色」では、音楽文化専攻卒業生の長谷田亜美さんをゲストに迎えて、展示会場でピアノの生演奏を企画されていました[※]。別分野とのコラボレーションを行うようになったのはなぜでしょうか。
小学生の時は楽器を演奏することが好きでした。様々な事情でピアノを習うには至りませんでした。が、学校の休み時間には好き勝手にピアノを弾いていましたね。遊ぶより演奏が楽しいと思ってたこともあったので、昔から芸術が一番楽しいと思えることだったのかもしれません。
長谷田さんとの出会いは大学の

体育の授業で、偶然仲良くなりました。演奏会も何度か見に行きましたが、自分が出来なかったことを続けている彼女にはいつも羨ましさや憧れを感じていました。私がかつから練習を始めて素晴らしい演奏をすることは難しいけど、自分の絵の空間で彼女に演奏してもらうことで、自分のやりたかったことがひとつ叶うのではないかと思います。コラボレーションに至りました。
今回の「ZAWA+」ではサウンドアーティストの柳引康平さんとタッグを組んで展示会を行いました。柳引さんとコラボレーションするに至った意図や経緯があれば教えてください。
2021年に江別市で作品を展示する機会[※]10があったのですが、同じ空間に柳引さんが音楽を流していました。そこで流れていた音楽は「波の音」や「盆踊りの曲」等、誰もが一度は聞いたことがある何気ない環境音でした。わたしの絵ですが、柳引さんにも似たものを感じ

ZAWA+

ロゴについて

卒業したあとどんな仕事をしていても、生活をしていても、大学で学んだことや、大学の仲間たちと過ごした時間は生かされている。どんな経験も、この先の自分につながっていく、という意味を込めて、「ZAWA+」の文字を一筆書きのようにつなげました。また”人生山あり谷あり”というイメージに合わせ、丸みを帯びたデザインにしました。

ZAWA+ vol.06 逆め友達「投げ道にいだす」

会期：2023年8月6日（日）～8月20日（日）

時間：10：30～12：00、13：00～17：00（※最終日は15時まで）

会場：北海道教育大学岩見沢校 BOX[i-BOX]

+有明交流プラザセンターホール

岩見沢市有明町南1番地1 JR岩見沢複合駅舎 有明交流プラザ2階

入場無料

企画：北海道教育大学岩見沢校 i-BOX

煤田真実／川岸優果／平松莉奈／中島聡一郎

藤野留朱／尾崎芳子



岩教の、その先へ

「将来こうなりたい！みたいな最終目標はありますか？」

「常にあれこれ悩んでいます。これ！ってものを決めてしまうと、そこに行けなかったときの落ち込みがすごいです。ゴール以外の良い着地点もありませんよ。漠然と流れに沿っていたら良いところに行き着くかな、一生懸命やっていたらチャンスが降ってくるかな、と思っています。」

「及川さんが今になって思う『学生時代にやっておいた方がいいよ！』と思うことを教えてください。」

「1ヶ月まるまる出かけられるのは大学時代しかないです。芸術祭をもう少し早く知っていたら良かったなと思いますね。長期的に滞在できることを早く知っていたら、もう何回か行きたかったです。」

「今、これから美術を学ぶ人に向けてメッセージをお願いします。」

「真面目にコツコツ生きてる人から。一番だよ。誰かが見てくれているから。平野先生がサラッと云った、今でも私が大事に信じている言葉です。」

「学生時代は、自分が正しいと思っていることや頑張ったことはなかなか報われませんでした。でも、ずっと報われないわけではなく、数年先に『あのとき頑張ってたな』と思うことがきつとあります。絶望しないでください。未来の自分が今の自分を褒めてくれる日は来ると思うので、それを信じて頑張ってください。」

